

令和 3 年 6 月 24 日現在

機関番号：82611

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H04788

研究課題名（和文）感情障害への認知行動療法の統一プロトコル：臨床試験の拡張による包括的検証

研究課題名（英文）Unified protocol of cognitive behavioral therapy for emotional disorders:  
Extension of clinical trial for the comprehensive examination

研究代表者

伊藤 正哉 (Ito, Masaya)

国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・認知行動療法センター・部長

研究者番号：20510382

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 18,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最も重要な目的は、うつ病と不安症に対する診断横断的な認知行動療法の統一プロトコル（UP）の有効性をランダム化比較試験により検証することであった。他に、UPの治療機序、神経基盤、長期効果の検討を目的としていた。臨床試験は目標症例数104例の登録を達成し、論文執筆まで進めた。加えて、神経基盤の解明に資するデータとして207件のMRI撮像を実施した。予備試験や観察研究を含めこれまでのデータを解析し、UPの治療機序やプロセスに関する総説や論文を国内外の雑誌に公表した。臨床試験のために作成した介入資料等は、UPの教育訓練のために幅広く活用されてきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、日本人の成人のうつ病や不安症に対する、汎用性の高い認知行動療法の有効性を、科学的に厳密な方法であるランダム化比較試験によって検証することを目的としていた。そのために、当初から目標としていた104名がこの臨床試験に参加した。加えて、この療法が作用するメカニズムや、関連する脳機能を明らかにするための研究を実施してきた。本研究によって、うつ病や不安症に対する新たな治療法の開発や、それが有効となるメカニズムを明らかにすることに貢献できた。

研究成果の概要（英文）：The primary aim of this study was to test the efficacy of a unified protocol of transdiagnostic treatment for depressive and anxiety disorders (UP) by a randomized controlled trial. Other objectives were to examine the therapeutic mechanism, neural basis, and long-term effects of UP. The clinical trial achieved the enrollment of the target number of 104 patients. The data was fixed, statistically analyzed. Drafting the primary outcome paper has almost completed. In addition, we obtained the participants' brain image at before and after the intervention. Using the data from preliminary trial and observational studies, we published articles on the therapeutic mechanisms and processes of UP. Interventional materials and other materials prepared for clinical trials have been used extensively for education and training of UP.

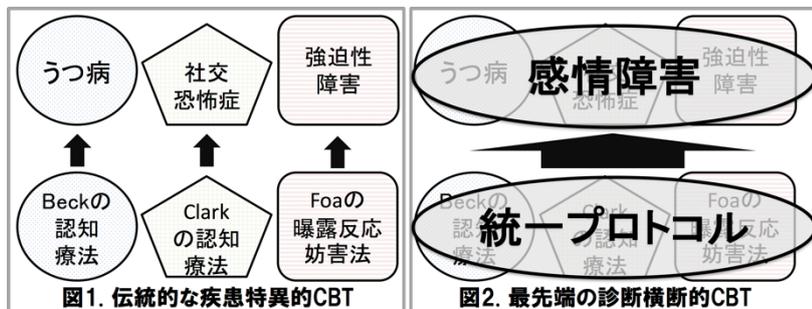
研究分野：臨床心理学

キーワード：うつ病 不安症 感情 認知行動療法 診断横断 脳画像 治療機序 臨床試験

## 1. 研究開始当初の背景

わが国の不安障害・気分障害の1年間の時点有病率は7.9%であり(Kawakami et al., 2005)、不安障害とうつ病の社会経済コストは年間2兆4000億円、3兆900億円に上る。直近の診療報酬改定では、うつ病に加えて不安症(社交不安症、パニック症)、強迫症に対して認知行動療法が健康保険適用となった(中央社会保険医療協議会, 2016)。

認知行動療法(Cognitive Behavioral Therapies; CBT)は、学習理論や認知理論に基づき、治療手続きが体系化された心理療法の総称である。診療ガイドラインや系統的レビュー



によると、中等症以上のうつ病(大うつ病性障害、持続性抑うつ障害)や不安症(社交恐怖、パニック症、全般不安症、限局性恐怖症)、強迫症、心的外傷後ストレス障害といった感情障害には、CBTが薬物療法に匹敵する治療選択として推奨されている。

最先端のアプローチとして、診断横断的(Trans-diagnostic)発想に基づくCBTが注目されている(図1, 2)。これは多くの精神疾患の治療に共通する介入法や、精神病理の共通過程を明らかにし、療法の効率・効果を高めようとする研究アプローチであり、3つの背景がある。

- 1) 生物神経科学・病因論：操作的診断基準ではなく、疾患に共通する根本要因を検討すべき(研究領域診断基準、Insel & Cuthbert, 2009; Brown & Barlow, 2002)
- 2) 疫学研究：精神疾患(特に感情障害)は高率に合併する(Kessler et al., 1994)
- 3) 治療研究：様々なCBT治療はだいたいにおいて共通している(Clark, 2011)

診断横断的な心理療法のうち、基礎研究と臨床試験の双方で最も強いエビデンスを示しているのは、統一プロトコル(Unified Protocol; UP; Barlow et al., 2011)である。UPは複数の精神疾患に共通する感情調整過程の不全に焦点を当てたCBTであり、臨床試験により不安症に対する高い有効性が報告されている(Farchione et al., 2012)。

UPの有効性が確認できれば、ひとつの治療法でうつ病だけでなく不安症も含めた複数の疾患に対応でき、治療者養成のコストが大幅に軽減できる。さらに、治療機序の解明により治療の効果増強が、治療反応性の神経マーカー同定によりテーラーメイド精神医療の前進が期待できる。このような背景から、若手研究(A)『感情障害への認知行動療法の統一プロトコルの有効性とその治療機序・神経基盤(25705018)』において大規模なランダム化比較試験及びその附属研究を実施してきた。

## 2. 研究の目的

本研究では、上述の臨床試験を世界最大規模に拡張し、①有効性検証、②治療機序の解明、③神経基盤の同定を目指すとともに、④介入後の長期追跡評価を行うことを目的とした。

## 3. 研究の方法

## 【1】 UP の評価者盲検ランダム化比較試験

**デザイン**：平成 25 年から開始した RCT を継続する。評価者盲検、平行群間、単施設、20 週の優越性 RCT である(表 1)。最高水準の厳格性基準として、Cuijpers et al. (2010)によ

表1. 臨床疑問の定式化 (PICO+T)

<b>Participants</b>	うつ病・不安症患者の成人104名が
<b>Intervention</b>	通常治療に加えてUPを受けることで
<b>Comparison</b>	通常治療の場合よりも
<b>Outcome</b>	うつ・不安症状(GRID-HAMD)が改善する
<b>+Time</b>	20週の介入期間において

る High Quality Study 基準(e.g., 構造化面接診断、Intention-to-treat(ITT)解析、 $N > 50$ 、評価者盲検)、コクランレビューの Risk of Bias 評価 (e.g., 割付隠蔽、盲検化、ITT 解析、選択的報告)をクリアしたデザインである。報告指針 SPIRIT Statements に基づき、臨床試験の方法詳細を公表している(Ito et al., 2016)。

**参加者**：20 歳以上で、DSM-IV-TR によるうつ病と不安障害の診断を満たす患者 104 名を対象とする。統合失調症、物質関連障害など、UP 遂行に障害となる問題を有する者は除外する。訓練を受けた独立評価者が、半構造化面接(SCID-IV-TR)により診断を評価する。当初の目標症例数(54 例)の組入れはすでに達成したが、世界最高水準の臨床試験とするため、最新知見(Farchione et al., 2016 年 4 月)を取り入れ、例数設計をより厳格にし直し、104 例に上方修正した。

**実施場所**：国立精神・神経医療研究センター病院

**評価**：主要評価項目は、21 週での半構造化面接 GRID-Hamilton Rating Scale for Depression; (GRID-HAMD)によるうつ・不安の重症度とする。副次評価項目は、不安、抑うつ、機能障害、生活の質、感情調整、向精神薬の処方量等とする。介入期間前・中・後・5 ヶ月後(0、10、21、43 週)に評価を行う。面接評価は、盲検化された独立評価者が実施する。安全性は脱落率や有害事象から評価する。治療 3 年後の長期追跡評価のために、該当事例から順次、29 年度より症状評価と脳画像測定を行う。長期追跡については、新たに倫理委員会の承認を得る。

**介入**：UP は週 1 回、約 50 分で実施し、20 週の治療期間中に 15 セッション程度実施する。治療は 8 モジュールから構成される(動機づけ高揚、感情の心理教育、非断定的気づき訓練、認知再評価、行動介入、内部感覚曝露、感情曝露、再発予防)。対照群は、通常治療を継続しながら UP 治療を待機する。通常治療の多くは、主治医による薬物療法と臨床管理を想定している。

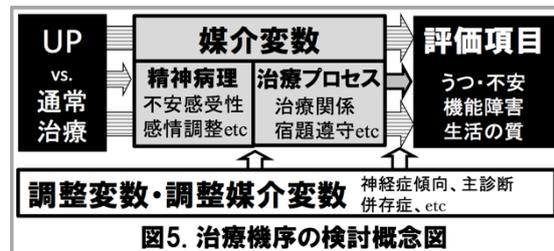
**安全性モニターと治療クオリティの維持**：これまで 3 年の臨床試験の継続から、治療者訓練、定期スーパービジョン、治療遵守評価、独立評価者訓練、評価者間信頼性の確認、安全性モニターの報告システムの整備、コーディネーター業務の調整、データの on-site および中央モニタリング、病院医師やコメディカルとの連携体制整備など、臨床試験の遂行に必要なあらゆる側面の研究体制を構築してきた。治療の質を維持するために、UP の開発者である Barlow 教授や Unified Protocol Institute の指導者(Todd J. Farchione、Shannon B. Zavala 博士)らのコンサルテーションを継続して受ける。

**統計解析**：ITT 原則に従い、うつ・不安の重症度 (GRID-HAMD) を従属変数、割付(介入群 vs 対照群)、測定時点(0, 10, 21 週)、それらの交互作用を独立変数として、線形混合モデルにより有効性を検討する。頑健性検証のため、層別因子(うつ病 vs. 不安症)を共変量とし感度分析を行う。

## 【2】 治療機序の検討

**概要：**UP 介入期間は毎セッションを録画・録音し、セッション評価、宿題遵守、治療への期待、治療原理解等のプロセスデータを系統的に収集する。

**統計解析：**構造方程式モデリング(R の Lavaan パッケージ・bLavaan パッケージ)によって、**図5**に示す要因が介入と治療効果を媒介する

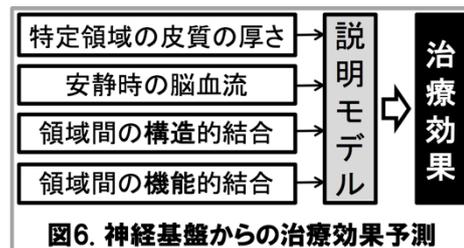


か検討する。また、**図5**に示す調整変数が、先の媒介関係に影響を与えるか(調整媒介モデル)を検討し、作用機序の個人差を規定する要因を明らかにする。妥当な推定結果を得るために、推定法には最尤推定による平均と誤差を事前分布に設定した客観ベイズ法を用いる(Ozuchowski, 2014)。

### 【3】神経マーカーによる治療効果の予測

**概要：**0・21・43週でT1強調画像、拡散強調画像、FLAIR画像、安静時fMRIを取得する(3.0 tesla Siemens MRI)。

**統計解析：**各領域の脳構造・活動を予測変数として、治療効果を予測するモデルを検証する(**図6**)。予測モデルの構築には、比較的規模の小さい集団においても精度の高いモデルが構築される機械学習のアルゴリズムである、サポート・ベクターマシーンとランダムフォレストを使用する。各アルゴリズムによる予測精度はRのCaretパッケージを用いて比較検証し、より精度の高いモデルを選択する。



## 4. 研究成果

### 臨床試験の進展

本体の臨床試験は、平成30年度までに目標症例数104例の登録を達成した。個人の心理療法についてのランダム化比較試験で、評価者をブラインド化し、バイアスを排除するための様々なデザインを施し、介入のアドヒアランスや評価者の面接の評定者間一致度を丁寧に検証した試験としては、おそらく我が国の臨床心理学において最大規模の臨床試験を完遂することができた。また、目標症例数の登録達成以降は、神経基盤の解明に資するデータ取得のために、ランダム割付を行わないかたちで撮像とUP実施を進めた(累計で18例登録済)。これまでのMRI撮像累計は207件となり、ベースラインの脳画像データのクリーニングを進めた。本研究の研究期間においては解析まで至れなかったが、心理療法の前後において、うつ病や不安症を含む様々な疾患を含めた診断横断的な脳画像データを取得できた意義は大きい。今後、これらのデータを用いて、上記の方法に示した手法により解析を進め、UPの治療反応を予測できるかを検証していく。

また、新型コロナウイルス感染症の感染拡大に対応するために、遠隔での認知行動療法の実施手法について入念に調査し、オンラインでのセッション実施を可能とする研究計画の変更を行い、倫理委員会の承認を得た。実際、オンラインによるUPの実施を進めることができ、今後の遠隔版のUPの提供に関する重要なデータを得ることができた。

### ランダム化比較試験に関する成果の公表

プライマリアウトカム論文は、データの固定を完了させ、解析を進め、外部専門家によるレビューも含めたBlinded Interpretationを実施し、改稿を繰り返し、投稿直前の状態まで進めた。この論文は本成果報告書の作成時点では未発表である。そのため、臨床試験本体によるプライマリ及びセカンダリアウトカムについての有効性、有害事象発生有無に関する安全性、介入の実施可

能性に関する側面については、現時点でこの報告書には記載できない。

Association for Behavioral and Cognitive Therapies のシンポジウムでは、2019年には我が国における UP 研究の発展に関してのオーラルプレゼンテーションを行った。2020年には、我が国における臨床試験の二次解析(感情調整、治療への期待、宿題遵守などが症状の改善につながる治療メカニズムの検証)の結果を公表した。加えて、これまでの長期間に及ぶ臨床試験での運用経験のうち、臨床試験コーディネート体制の整備や運用、マスク維持の手法、独立評価者による面接評価での信頼性確保の取り組み、独立評価者訓練手法の構築と実際についてまとめ、日本認知療法・認知行動療法学会等で発表を行った。加えて、当臨床試験のノウハウが今後のさまざまな研究で活用されるよう、コーディネートや独立評価の実際についてはデモンストレーションビデオを作成した。また、UP 実施未経験者の訓練手法を検討した。

### **UP の治療機序や対象とする感情障害に関する成果の公表**

UP の治療機序に関する研究として、予備試験のデータを用いて二次解析を行い、国際誌にて公表した (Hosogoshi et al., 2020)。この論文では、感情表出抑制が大きいことにより、治療効果が減じる可能性が示唆された。さらに、大規模な観察研究のデータを用いて、UP を始めとした認知行動療法において重要な介入モジュールである行動活性化とマインドフルネスがうつ病患者においてどのような機能を有するかを検証した (Takagaki et al., 2020)。

UP は感情に焦点を当てた治療である。そこで、ポジティブ感情によるネガティブ感情の緩和がうつや不安を予測するかを大規模調査のデータを用いて二次解析を行い、検討した (Yamaguchi et al., 2018)。この結果を踏まえて、新型コロナウイルス感染症のパンデミック時におけるメンタルヘルスの問題について、ポジティブ感情が果たす役割を考察し、公表した (Yamaguchi et al., 2020)。感情調整については、児童版の感情調整を測定する尺度の日本版の信頼性と妥当性を検証した (Namatame et al., 2020)。さらに、UP を含む認知行動療法の介入がベンゾジアゼピンの処方減量につながっていた観察研究の結果を公表した (Nakajima et al., 2020)。

### **まとめ**

上記以外にも、本研究を進めていく上で副次的に得られた知見や、臨床試験を進めるために翻訳したり、独自に開発したりした様々な治療マテリアルの成果物を得ることができた。実際、これらのマテリアルは、研究者が所属する認知行動療法センターで実施する UP 研修にも幅広く活用されてきた。さらに、本研究から派生した様々なスピノフ研究が展開している。これには、児童青年版 UP(藤里、15K17288)、グループ版 UP(加藤、15K17319)、簡易版 UP(伊藤、16K13500)の開発のほか、UP 治療群と一般健常群を比較する神経画像研究(宮前、16K17354)、人工知能技術を用いた認知行動療法の知識循環構築の試み(伊藤、20K20876)などがある。これら研究の礎を与えたという点でも、本研究の意義がある。

本研究は、うつや不安など、様々な感情で苦しむ人に対する汎用性の高い UP の有効性を検証するための研究である。その成果が、必要とする人に届いてこそ本研究の社会的意義が果たされる。そのため、今後は社会実装研究として、より効果的及び効率的に、必要な人へとつなげる研究として発展していくことが期待される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 7件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 Takagaki K, Ito M, Takebayashi Y, Nakajima S and Horikoshi M	4. 巻 11
2. 論文標題 Roles of Trait Mindfulness in Behavioral Activation Mechanism for Patients With Major Depressive Disorder	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Frontier in Psychology	6. 最初と最後の頁 845
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.3389/fpsyg.2020.00845	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 伊藤正哉・加藤典子・藤里紘子	4. 巻 19
2. 論文標題 うつと不安に対する診断横断的な認知行動療法の最前線	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 分子精神医学	6. 最初と最後の頁 23-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Hosogoshi Hiroki, Takebayashi Yoshitake, Ito Masaya, Fujisato Hiroko, Kato Noriko, Nakajima Shun, Oe Yuki, Miyamae Mitsuhiro, Kanie Ayako, Horikoshi Masaru	4. 巻 277
2. 論文標題 Expressive suppression of emotion is a moderator of anxiety in a unified protocol for transdiagnostic treatment of anxiety and depressive disorders: A secondary analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journal of Affective Disorders	6. 最初と最後の頁 1~4
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1016/j.jad.2020.07.132	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Yamaguchi Keiko, Takebayashi Yoshitake, Miyamae Mitsuhiro, Komazawa Asami, Yokoyama Chika, Ito Masaya	4. 巻 12
2. 論文標題 Role of focusing on the positive side during COVID-19 outbreak: Mental health perspective from positive psychology.	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy	6. 最初と最後の頁 S49~S50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1037/tra0000807	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Nakajima Aiichiro, Kanie Ayako, Ito Masaya, Hirabayashi Naotsugu, Imamura Fumi, Takebayashi Yoshitake, Horikoshi Masaru	4. 巻 Volume 16
2. 論文標題 Cognitive Behavioral Therapy Reduces Benzodiazepine Anxiolytics Use in Japanese Patients with Mood and Anxiety Disorders: A Retrospective Observational Study</p>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neuropsychiatric Disease and Treatment	6. 最初と最後の頁 2135 ~ 2142
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2147/NDT.S263537	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Namatame Hikari, Fujisato Hiroko, Ito Masaya, Sawamiya Yoko	4. 巻 Volume 16
2. 論文標題 Development and Validation of a Japanese Version of the Emotion Regulation Questionnaire for Children and Adolescents</p>	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Neuropsychiatric Disease and Treatment	6. 最初と最後の頁 209 ~ 219
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.2147/NDT.S211175	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yamaguchi Keiko, Ito Masaya, Takebayashi Yoshitake	4. 巻 91
2. 論文標題 Positive emotion in distress as a potentially effective emotion regulation strategy for depression: A preliminary investigation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Psychology and Psychotherapy: Theory, Research and Practice	6. 最初と最後の頁 509 ~ 525
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1111/papt.12176	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Curtiss Joshua, Ito Masaya, Takebayashi Yoshitake, Hofmann Stefan G.	4. 巻 6
2. 論文標題 Longitudinal Network Stability of the Functional Impairment of Anxiety and Depression	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Clinical Psychological Science	6. 最初と最後の頁 325 ~ 334
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1177/2167702617745640	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 Masaya Ito
2. 発表標題 Current status of research on the Unified Protocol for the transdiagnostic treatment of emotional disorders in Japan
3. 学会等名 Association for Behavioral and Cognitive Therapies 53rd Annual Convention (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Shigeeda
2. 発表標題 An artificial intelligence-aided approach to train cognitive behavioral therapists in the Unified Protocol for transdiagnostic treatment of emotional disorders in Japan (シンポジウム発表)
3. 学会等名 Asian Congress of Health Psychology (ACHP 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Yuko Shigeeda
2. 発表標題 An artificial intelligence-aided approach to train cognitive behavioral therapists in the Unified Protocol for transdiagnostic treatment of emotional disorders in Japan (ポスター発表)
3. 学会等名 Asian Congress of Health Psychology (ACHP 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤正哉
2. 発表標題 臨床研究におけるスーパービジョンの方法
3. 学会等名 日本健康心理学会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伊藤正哉
2. 発表標題 感情障害に対する診断を越えた治療のための統一プロトコル
3. 学会等名 集団認知行動療法研究会 第10回学術大会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 藤里紘子・加藤典子・生田目光・野村朋子・二宮宗三・伊藤正哉・宇佐美政英・堀越勝
2. 発表標題 児童の感情障害に対する統一プロトコルの実施可能性と有効性の検討
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口慶子・大江悠樹・宮前光宏・駒沢あさみ・中山千秋・伊藤正哉・堀越 勝
2. 発表標題 臨床試験における独立評価者の訓練プログラムとその事例：うつ病と不安症への統一プロトコルのランダム化比較試験での実践
3. 学会等名 第18回認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山口慶子・竹林由武・伊藤正哉・堀越勝
2. 発表標題 不安症に対する曝露療法の研究動向 トピックモデリングによる検討
3. 学会等名 第11回日本不安症学会学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 豊田彩花, 伊藤正哉, 加藤典子, 花田孝子, 溝川英里子, 駒沢あさみ, 堀越勝
2. 発表標題 認知行動療法のランダム化比較試験における独立評価者マスキングのための臨床研究コーディネート -JUNP Studyでの工夫-
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Noriko Kato, HirokoFujisato, Hikari Namatame, Masaya Ito, Masaru Horikoshi
2. 発表標題 Development of the Japanese version of the Unified Protocol for Transdiagnostic Treatment of Emotional Disorders in Children.
3. 学会等名 13th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 HirokoFujisato, Noriko Kato, Hikari Namatame, Masahide Usami, Masaya Ito, Masaru Horikoshi
2. 発表標題 Progress report about the open-label feasibility trial of the Unified Protocol for Transdiagnostic Treatment of Emotional Disorders among the Japanese Children.
3. 学会等名 13th International Conference on Child and Adolescent Psychopathology (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮前光宏・山口慶子・大江悠樹・駒沢あさみ・中山千秋・伊藤正哉・堀越勝
2. 発表標題 臨床試験における独立評価班の運用: うつ病と不安症への統一プロトコルのランダム化比較試験での実
3. 学会等名 第18回日本認知療法・認知行動療法学会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 監修 伊藤正哉・堀越勝（著・バーロウ・ファーキオーニ）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 診断と治療社	5. 総ページ数 248
3. 書名 不安とうつの統一プロトコル 診断を越えた認知行動療法 臨床応用編	

1. 著者名 伊藤正哉	4. 発行年 2021年
2. 出版社 遠見書房	5. 総ページ数 未定
3. 書名 公認心理師の基礎と実践 第8巻 感情・人格心理学 第4章 ポジティブ感情の効果	

1. 著者名 伊藤正哉、蟹江絢子、中嶋愛一郎、堀越勝	4. 発行年 2019年
2. 出版社 科学評論社	5. 総ページ数 未定
3. 書名 精神科診療マニュアル V. 不安に関連する疾患 3. 全般不安症	

1. 著者名 伊藤正哉・藤里紘子・加藤典子	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京大学出版会	5. 総ページ数 未定
3. 書名 現代の臨床心理学 第4巻 臨床心理研究法 診断横断アプローチ	

1. 著者名 David H. Barlow and Todd Farchione (Ed), Amantia Ametaj, Nina Wong Sarver, Obianujunwa Anakwenze, Masaya Ito, Michel Ratner and Ramya Potluri(Author of Chapter 16)	4. 発行年 2017年
2. 出版社 Oxford University Press	5. 総ページ数 376
3. 書名 Applications of the Unified Protocol for Transdiagnostic Treatment of Emotional Disorders (Chapter 16, Cross-cultural Applications of the Unified Protocol: Examples from Japan and Colombia)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

不安とうつへの認知行動療法の統一プロトコル <a href="https://www.ncnp.go.jp/cbt/research/archives/5">https://www.ncnp.go.jp/cbt/research/archives/5</a>
--

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	堀越 勝  (Horikoshi Masaru)		
研究協力者	加藤 典子  (Kato Noriko)		
研究協力者	大江 悠樹  (Oe Yuki)		

## 6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤里 紘子  (Fujisato Hiroko)		
研究協力者	中島 俊  (Nakajima Shun)		
研究協力者	山口 慶子  (Yamaguchi Keiko)		
研究協力者	宮前 光宏  (Miyamae Mitsuhiro)		
研究協力者	竹林 由武  (Takebayashi Yoshitake)		
研究協力者	奥村 康之  (Okumura Yasuyuki)		
研究協力者	豊田 彩花  (Toyota Ayaka)		
研究協力者	蟹江 絢子  (Kanie Ayako)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	重枝 裕子  (Shigeeda Yuko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
米国	ボストン大学			